# 七人の敵が居た

石川達三

# 七人の敵が居た

七人の敵が居た

昭和五十五年九月二十五日　発行
昭和五十六年二月十日　六刷

定価一二〇〇円

著者　石川達三
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社　新潮社

郵便番号　一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話　業務部東京03二六六—五一一一
　　編集部東京03二六六—五四一一
振替　東京四—八〇八番

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷　錦明印刷株式会社　製本　大口製本株式会社
© Tatsuzō Ishikawa 1980 Printed in Japan

七人の敵が居た　目次

未定稿として 7
なぜ刑事が…… 8
もうひとりの人が…… 10
誰か手引きを…… 11
何だか早過ぎる 13
具体的な要求 15
書類は揃っていた…… 19
私は裏切られた……? 22
調べ室の問答 25
大学側の態度 29
「夕焼」という酒場 32
検察庁の口出し…… 36
辻褄が合わない…… 38
供述の補充書 45
新聞に書かれた…… 48
起訴状その他 51
別件逮捕 55
奈村氏の答申書 58
二人の弁護士 61
ヴァレンタイン・デーの裏切り 64
雪子より愛をこめて 70
牧山先生は女たらし 72

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

雪子の二重人格 75
何等かの意図をもって…… 78
事件の直前にあった事―― 81
二月十一日の分析 87
喰い違う証言 92
証拠とは一体何だ…… 98
国会議員の登場 105
怪人物池田友行 111
池田友行の奇怪な証言 117
公判直前の両者の在り方 129
被告人の悲痛な手記 132
証拠不充分の冒頭陳述 134
検察官の怠慢 140
検察官に疑問あり 146
海野敬吉の殺意 150
複雑な人間関係…… 152
公判廷に於ける雪子の態度 158
宣誓にいつわり有り 164
加害者か被害者か…… 170
何の為に虎ノ門へ 176
海野雪子は誣告の罪か 182
池田友行は正体不明 188

血を吐く思いの告白 195
牧山の自白は有り得ない 201
論告に何の証拠もない 207
事実の認定は証拠による…刑訴法 213
検事が証拠を湮滅した…… 219
判事は迷っていた…… 225
追い詰められた海野雪子 231
主任弁護士の激怒 238
陰謀集団の分裂 244
雪子は共犯者になっていた？ 250
被告はつんぼ桟敷か？ 256
判決は誰が書いたか？ 262
人間心理の問題として…… 268
控訴裁判の研究 272
高裁判決は不鮮明 274
牧山教授のあきらめ 280
雪子に曳きずられた公判 286

# 七人の敵が居た

『サンデー毎日』連載（昭和54年9月9日号～昭和55年8月3日号）

## 未定稿として

誤解がないように、始めからはっきり書いて置かなくてはならない。是は虚構の物語ではなくて真実の記録である。

けれども、真実の記録であるが故に、どうしても解らないところがある。人間と人間の間の愛慾の関係、利害の関係、それに法律がからんで来れば、複雑怪奇、とても第三者には理解し切れない部分が出て来る。その理解し切れない不明の、不可解な部分をも含めて、是は一点の虚構もない真実の記録である。一番最初に起った不可解な事件が一番最後にならなくては理解できないような、そういう錯綜した事件の記録である。

問題のA氏もB嬢も、現に東京の街の中で生きて動いている。会おうと思えば明日にでも会える。だから是は物語ではなくて真実の記録であり……そして実はまだ終ってはいない、未完成の、従って不確実な記録である。

そういう次第でこれは後日何か新しい事実が発見された時には、すっかり新しく書き直されることになるかもしれない。だから今のところ（草稿）として、或いは（未定稿）として発表して置くより仕方がない。つまり今は真実と思われている事にも、（事実の裏に虚偽）がかくされているかも知れないのだ。……

**なぜ刑事が……**

次に、この記録の中に登場する人物、施設、場所などはその個々の名誉の為に、ほとんどすべて仮名あるいは符号を以て表示しなくてはならない。昭和四十×年三月三日、曇。まだ春になり切れない、少し寒い朝であった。雛祭りの日である。牧山教授は軽い手提げ鞄ひとつを持ったばかりの身軽な姿で家を出た。垣根の下に水仙の葉がかなり伸びていた。

門を出て五、六歩行くと、それまで電柱にもたれて雑誌を見ていた若い男が大儀そうに近づいて来て、ちょっと会釈をした。「お早うございます先生……」

挨拶をされて、何だか変な気がした。理由はわからないが、嫌な気持であった。その男はレーンコートを着て、中肉中背、帽子はかぶらず、身なりは質素であるが肩幅ががっしりしていた。胸のポケットに手を入れながら、「牧山先生でしたね」と言った。「僕はこうゆうものですが……」

ポケットから黒っぽい表紙の手帖を出して見せてくれた。警察手帖というものを教授は初めて見た。「……お忙しいところを恐縮ですが、僕と一緒においで下さいませんか」

そのとき何時の間にかもうひとりの、似たような若い男が先生のうしろに黙って立っていた。これは只事ではない……と先生は思った。「何ですか。僕を逮捕するんですか。人違いじゃありませんか。……ふむ……逮捕状はお持ちですか」

「ええ、そういう事になるかも知れませんが、今はただ、一緒に来て貰いたいんです」

「ああ、任意出頭ですか」と先生はうなずいた。しかし牧山征一は大学教授であり法学博士であった。「ちょっと、その理由だけお聞きしたいですな。どういう嫌疑で僕を取り調べしようと言うのですか」

「それは、向うへ行けばみんな解ります」

「それはそうでしょうが、理由だけひとこと、聞かせて貰いたいですな。拘引する時には理由を明



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

示する必要があるはずです」と、先生は法律家らしい言い方をした……。

以上の会話は、録音されていない。従って、このような会話が行なわれた……という証拠は何もない。つまり是は、このような場合に必らず取り交されるであろう会話を（推定）したものである。その短い押し問答の末に一方の刑事が、「では申しましょうか……。あなたは大学の学生で、海野雪子という娘さんを、御存じでしょうな……。御存じですね……。その学生と先生のことについて、お訊きしたい事があるんですよ」

この会話も録音されてはいない……従って（事実である……）という証拠はないが、牧山教授が黙って二人の刑事に従って警察へ連行されたという事実が、そのような会話があった事を証明している。

刑事たちは街角に車を待たせていた。彼等はうしろの座席に先生を乗せて、自分たちはその両側に腰をかけた。相手の逃亡を防止する為の座り方であった。……そこから以後の事については牧山教授の手記がある。教授はよほど口惜しかったと見えて、沢山の手記を書いている。繰り返し繰り返し、執拗な書き方をしている。

海野雪子という学生については、身に覚えがあった。六十四歳の老教授が二十何歳の未婚の教え子との間に情交事件を起したというのは、いかにも恥かしい。教育者としては他人に知られたくない事であった。……それがどうして警察に知られたか。誰かがわざわざ警察に知らせたに違いない。誰が、何の為に警察へ密告したのか。それが解らない。

本当を言うと、あの事が警察に知られたからと言って、何も困る事は無いはずであった。先生は既に相当の老人ではあったが、肉体的にはまだわりあいに健康であった。身辺に近づいて来た若い娘に対して情慾を感じた、そして情交を求めた……何でもない、最も平凡な事であった。一方が男性であり他方が女性である限り、何の不思議もない当りまえな事であった。世間の人たちは一般的な道徳感情で先生を非難するだろう。しかしそれは道徳感情であって法律とは何の関係もない。な

ぜ警察が自分を連行するのか。牧山教授は法を犯した覚えはない。そんな不用意な事はできない立場であった。

**もうひとりの人が……**

しかし先生には一つ気にかかる事があった。海野雪子と二人きりの、(完全に私的な)行為を知っている人はひとりも居ないはずである。それがどうして警察に知られたのかも不思議であったが、警察よりも前にもうひとりあの事を知っている人があった。後になって教授は自分の手記の中に二度も繰り返して書いている。(忘れもしない二月十五日の事でした。午後二時すぎに私は不意に未知の人の訪問を受けました)

その男は四十年輩で、(一見与太者風であった)と彼は書いている。紹介者も何も無しに彼はいきなり先生の特別教室のドアを開けて、「牧山先生、ああ、あんただね。ちょっとお邪魔しますよ」と言った。そして大型の名刺を出した。山形和光、山形建設産業株式会社社長と印刷してあった。

教授は机の上に出された山形の名刺を、不愉快な顔をして黙って眺めた。彼はキリスト教系のLM女子大学の常任理事であり、一、二年後には学長に推されるかも知れないという有力者でもあった。彼に面会を求める外部の人は守衛から事務を通し秘書を通し、時間と場所の指定を求めてから案内者に連れられて訪ねて来るのが普通であった。それをこの山形という男は前以て何の連絡もなしにいきなりドアを開けて入って来た。無礼者である。

第一、この広い大学の敷地の中に二十以上の建物が立っている所を、この男はどうやって牧山教授の特別教室を探し出したのか。無礼であるばかりでなく、不思議でもあった。それからもう一つ、LM女子大学は東京の城東方面では相当に有名な大学であったが、暮から正月にかけて学生たちのストライキがあった。その女子学生たちには外部の男子学生の応援が加わって、かなり不穏な動きも有った。入学試験と卒業式の時期であったから大学側は大事を取って、二月二日からロックアウ

トを強行した。教職員、準職員以外の者は学生をも含めて、構内には一歩も入れない厳戒態勢をしき、門という門には守衛とガードマンとを配置していた。だから二月十五日の大学構内は森閑としていた。

**誰か手引きを……**

その厳重な警戒の中を、全く無関係の山形建設産業社長がたったひとりで、どうやって校門のバリケードをくぐりどうやって牧山教授の特別教室を探し当てて来たのか。誰か、この男を手引した者が居たに違いない。「俺はねえ先生……」とその四角な顎をした、鼻の大きな男は言った。「海野の家から頼まれて、海野家の代表という資格で来たんだよ。そう言えばあんたには解るはずだ」

その一言は牧山教授にとって衝撃的であったに違いない。一つの謎が解けた。この男は海野雪子と牧山との、あの（事件）を知っているのだ。それを誰から聞いたか。雪子自身が外部の者に知らせない限り、誰も知っている者はないはずであった。そしてこの山形和光は（海野家を代表して来た）と言っている。それならばもはや雪子の両親もあの事を知っているに違いない。しかしどうして雪子が二人きりの秘密を口外してしまったのか……。

後になってから解ったことであるが、この山形和光という建設産業の社長はいきなり真っ直ぐに牧山教授の特別教室へ来たわけではなかった。彼はその日の午前中に二度も三度もＬＭ女子大学に外から電話をかけていた。大学の事務室の誰かが応対して、目下大学はロックアウトの最中であって、どのような御用かは存じませんが外部の人はどなたも構内にはいる事はできない、従って牧山教授に御面会もできないという返事をした。しかし相手は強硬で、正門の守衛に電話を取りついでくれと言い、守衛と談判をした。

守衛が強硬に構内立ち入りはできないと主張すると山形は、それでは午後一時半にこちらから正門まで行くから、その時刻に牧山先生も正門まで出て来るように頼んでほしい、重要な話だから是

非たのむ、鉄格子の門の内と外とで話をしよう……と要求した。
そういう経緯が有ったらしいのに、その事は守衛から牧山教授に一言も知らされていなかった。（これこれという人が先生に面会を申込んで来たが断りました）という報告が、なぜ先生に伝えられなかったのか。それは守衛の手落ちであったのか、それとも何か計画的な沈黙であったのか。……

正門の守衛のところではそういういきさつが有ったにもかかわらず、午後二時すこし過ぎに山形和光はどこをどうして潜り抜けて来たのか、幾つもの建物のあいだを迷いもせずに教授の特別教室をたずね当てて来たのだった。いつも牧山先生の教室に出席している学生は別として、その他の学生はほとんど知らないような三階の小さな教室であった。

実はそのとき、牧山教授は山形和光ではなくて、もっと別の人を待っていた。午後二時半に海野雪子がこの特別教室へ来る約束になっていた。彼女は体育部の事務室の助手であったから、準職員としてロックアウトの校門を出入りすることができた。助手の仕事は彼女のアルバイトであり、授業料の何分ノ一かを自分で稼ぎ出しているらしかった。

だから彼女は赤旗が五、六本風になびいている校門から守衛に会釈を送って、まっすぐに牧山教授の教室へ来ることができるはずであった。校内に学生の姿はなく、間が抜けたほど森閑としていて、海野雪子の来訪を見咎める人もなく、その日の媾曳きを二人がどんなに楽しもうと何の邪魔もはいらないはずであった。

海野雪子は特に美人というのではないが、背丈もあり色の白い、ゆたかなからだつきの娘であった。牧山先生の教室では物静かで、むしろ眼立たない学生であった。

その教室は英会話と国際事情との特別教室で、学年や学部の種類と関係なく、少数の希望の学生だけに解放されている、牧山教授だけの自由な教室であった。池田友行という助手がひとり居たが、ロックアウト中は仕事もないのでほとんど休んでいた。だからその日、二月十五日の午後、先生は

テープレコーダーの音楽を聞きながら、雪子の来訪を待って年甲斐もなくそわそわしていた。
そこへいきなり招かれざる客の山形和光がはいって来た……という順序であった。

**何だか早過ぎる**

山形和光は牧山先生の前に椅子を引き寄せ、わざとらしく横向きに座り足を組み、（右手の肱を私の机の上にのせ、その手を立てて自分の顎を支え、わざと自分の顔を突き出すようにして私の眼を見つめた）……嫌がらせの脅迫的なポーズであったと教授はその手記の中に書いている。
そんな無礼な態度を見せつけられても、いまの教授の立場は分が悪かった。海野雪子との関係を問いつめられると、彼の方に勝ち目はなかった。あとは何とかして穏便に話をつけなくてはならない。嫌らしい相手ではあるが、この男を怒らせてはいけない。
だから牧山先生は隣のやや広い録音室に彼を案内して対座した。この部屋ならば絶対に話が外に洩れるはずはない、防音設備のついた部屋であった。
ずっと後の事であるが牧山教授が起訴されて公判が開かれたとき、証人として法廷に喚問された山形和光は弁護人の質問に答えて、（その録音室という所へはいったとき、牧山教授はすぐに入口の扉に鍵をかけました）と言っているが、牧山教授の方は、（それは嘘です私は鍵をかけた覚えは有りません、第一そんな必要もありませんでした）と答えている。
その問答は公判記録に残っているが、本当に鍵をかけたかかなかったかを証明する材料は何も残っていない。その状況説明の喰いちがいは両者の間に何等かの計算が有った為かも知れないが、その計算の意味は結局表面には出て来なかった。
山形和光はその部屋にはいるなり両足を開いて突っ立ったまま、「お前は大学教授のくせに何だ、俺が前から可愛がっていた海野雪子に暴行を加え、お嫁に行けない躰にしてしまった、どうするつもりだ」と言った。「あの子の父親は激怒してお前をぶんなぐるとか殺してやるとか言うのを、や

っとなだめて俺が代表で、とにかくお前さんの料見を聞いて見ようという訳でやって来たんだ。え、おい、どうするつもりだ」

そして、どういう関係があるのか解らないが（警視庁の捜査官という人の名刺を二枚、私の眼の前に突き出して、俺はいつでもお前を逮捕させることができるんだ、新聞、雑誌にも書かせてやる、勿論この学校には全部知らせてお前を馘にしてやる、それでもいいかと私をどなりつけました）と教授は自分の手記の中に書いている。

それから更に山形は、「お前は良い所に住んでいるな、市川だろう、お前の家もちゃんと調べてあるんだ」と、いかにも建設産業らしい言い方をした。しかしそのとき牧山氏は変な疑問を感じていた。

海野雪子と最後に会って極秘の慾情をたのしんだのは二月十三日、つまり一昨日の午後五時の事であった。それから二月十五日午後二時半の現在まではまる二昼夜も経っていない。その間に海野雪子は二人の関係を親たちに白状し、親たちはこの山形和光に事情を説明し、山形は彼女の親たちをなだめ、牧山氏との交渉のことを引き受け、次に市川市の郊外にある牧山先生の家を偵察し、そして今日の午前中にはもうLM女子大学の事務室に牧山先生と面会の為の電話をかけて来た……ということになる。

ずいぶん早い、何だか早過ぎるような気がする。こういう事がそんなに手順よくすらすらと運ぶものだろうか。……しかし今のところその疑いを解いてくれるような事情は一つも無いのだから、そのまま牧山先生は黙って呑み込んでおくより仕方が無かった。

（それから山形は一時間以上も座りこんであらゆる脅迫的な言葉を吐き散らしたあと――こんな不愉快なはなしは一刻も早く蹴をつけようじゃないか、そうしなくてはお前だって困るだろう、今晩七時、俺の事務所まで来い――と言いました。私は、今夜は緊急の用事があるから行かれないと、約束は断りましたが、彼は私の承諾を求めないで一方的に約束を押しつけておいて、足音も荒く帰



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com